

(3) 個別専門家派遣

1) 大気汚染防止 ドナウイパロシュ大学

派遣国名	ハンガリー
専門家氏名	田 森 行 男
担当分野 (プロジェクト名)	大気汚染防止
派遣期間	1996年10月 - 1998年9月
配属先	ミシュコルツ大学ドナウイパロシュ大学
業務概要	上記大学において、大気汚染防止技術を含む環境工学の講義及び研究指導を行う。講義内容は、大気及び水質汚染防止、固形廃棄物処理、土壌汚染、騒音及び振動などである。

	調査細目	評価結果
1. 目標達成度		
業務実施計画書に示された目標は達成しているか (専門家の認識)		目標達成度合いについては、講義については90%、研究指導70%、調査研究70%であり、概ね達成されたと言える。
C/Pの技術の習得度はどの程度か (C/Pの認識)		講義を受けた生徒たちは、環境保全に関する幅広い知識を専門家の行った授業を通して学ぶことができた。ことに英語での専門用語の習得は、卒業後その必要性を再認識しており評価している。 また、講義内容そのものは、大学において以前から設定されていたが、環境保全に関する機器や機材を用いて新しい環境測定方法を専門家は授業において紹介し役だった。
2. 計画の妥当性		
相手国側のニーズにあっているか	政策目標との関連	環境に対する意識の向上は、今後21世紀においてもっとも大事なものである。そしてハンガリー国においても EU 統合も含めて環境に対する意識は高まってきており、本専門家の大学で講義を通して将来ハンガリーの環境問題に携わる人材の教育に携わったことは、大きくハンガリー国の政策を支持するものである。
	スキーム選択の適切さ	そして講義された幅広い講義内容は、要請に沿った妥当なものであった。
	日本の技術の有用度	大学においては、環境に関して講義できる人材が少なく、また英語で講義できる人材がいなかった。このような意味で専門家の貢献は役だった。 環境測定機器の新しい測定方法、公害防止方法を紹介したという点で、日本の環境技術の導入の必要性があった。
	他ドナーとの援助の重複	なし。
3. 効率性		

投入の時期は適切であったか		短かった。コースに慣れるのに、最低 1 年間はかかるので、2 年は少し短かったのではないか？もう少し長くても良かったと思う。
投入の質は適切であったか	日本側の人材・ノウハウの活用度	高度な専門知識を有しており適切であった。
投入の量は適切であったか		適切であった。
投入方法は適切であったか		適切であった。
4. インパクト		
専門家帰国後、C/Pは習得した技術をどのような方法でどの程度業務に活用してきたか		講義を受けた生徒たちは、環境保全に関する幅広い知識を専門家の行った授業を通して学ぶことができ、ことに英語での専門用語の習得は、卒業後その必要性を再認識しており評価している。 しかし、専門家が担当した授業は、大学側の都合もあり、継続できない状態となっている。 内容については、ハンガリー語において行っているが、英語での必要性が高いので、今後英語で行う授業を復活させたい。
技術移転された結果、どのような影響がでているか		良いインパクトをもたらしている。外国人教授を招いたことで、学内を活性化することができた。 また生徒は、欧州の技術に慣れているが、それ以外に日本の技術にも触れることができ、幅ひろい知識を身につけることができた。
5. 自立発展性		
自ら学んだ技術を使用しているか。		良いインパクトをもたらしている。外国人教授を招いたことで、学内を活性化することができた。 また生徒は、欧州の技術に慣れているが、それ以外に日本の技術にも触れることができ、幅ひろい知識を身につけることができた。
他の人にもその技術を伝達しているか。		新しく紹介された環境機器の測定方法や環境防止方法については引き続き教えている。また専門家との共同アイデアでスタートした機会工学内の環境保全プログラムについても引き続き実施している。

